



岐阜市は斎藤道三や織田信長など名高い戦国武将が活躍した舞台です。道三・信長は何故岐阜市を選んだのでしょうか？英雄たちが欲しかった岐阜！その歴史を作ってきた武将や武士団、彼らの知られざる活躍と一緒にひも解いていきましょう。身近なところにある歴史が、新たな気付きにつながるかもしれません。

川湊絵図を読む

来年（令和9年）は岐阜市の鵜飼観覧船事業が市営化してから100周年になります。今回はこれを記念して、岐阜市歴史博物館の研究成果を参考に近世川湊の姿を描いた絵図（図1）を読み解いてみたいと思います。



岐阜市ぎふ魅力づくり推進部
文化財保護課
特任研究員 内堀 信雄

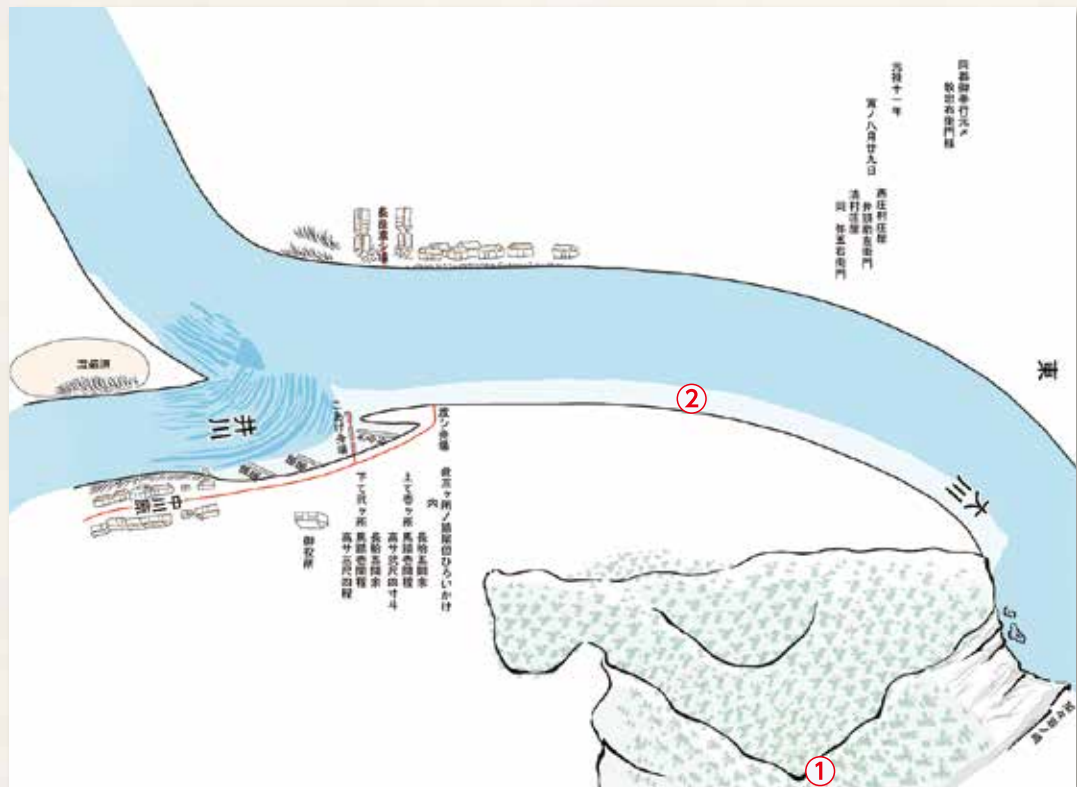
プロフィール
昭和34年 栃木県宇都宮市に生まれる
昭和61年 名古屋大学大学院文学研究科（考古学）卒業
岐阜市教育委員会にて信長公居館跡発掘調査などを担当。
主な著書
『東海の名城を歩く 岐阜編』（共編、古川弘文館、令和元年）
『戦国美濃の城と都市』（高志書院、令和3年）

1 長良川と金華山

画面右下（東）から左上（西）へと長良川「大川」が大きく蛇行しています。右下部には金華山（①）が描かれています。金華山の右端の長良川と接する部分に切り立った崖や岩礁が描かれ「加々岩（鏡岩ノ崎）」と注記されています。長良川は画面左で支流「井川」を分岐させます。分岐点付近には無数の縦筋で瀬が表現されています。分岐点から鏡岩までの南岸（②）は河原を示す白い帯が描かれています。上流より流してきた筏はこの河原（現長良橋左岸付近）で組み直したようです。

2 中河原湊

分岐した長良川支流井川の南岸は大きく内湾した形状に描かれ、「猿尾」^{（さるお）}「こあげ（小揚）舟場」と注



■図1 長良川湊絵図（個人蔵）※翻刻一部加筆

記され、「ひろいかけ」である3つの猿尾があることと各猿尾の寸法が記述されています。この「ひろいかけ（拾掛）」とは石積みを意味するようです。木曽川の事例ですが石積みの猿尾堤が各務原市前渡西町に現存しています。小揚舟場は小さな荷物を揚げる場所という意味で、棧橋のようなものが3つ連続して表現され、道で接続されています。なお現在の鵜飼観覧船乗り場は堤を乗り場の回りにめぐらしており、絵図に描かれた中河原湊の姿と似ています（写真1）。

記され、「ひろいかけ」である3つの猿尾があることと各猿尾の寸法が記述されています。この「ひろいかけ（拾掛）」とは石積みを意味するようです。木曽川の事例ですが石積みの猿尾堤が各務原市前渡西町に現存しています。小揚舟場は小さな荷物を揚げる場所という意味で、棧橋のようなものが3つ連続して表現され、道で接続されています。なお現在の鵜飼観覧船乗り場は堤を乗り場の回りにめぐらしており、絵図に描かれた中河原湊の姿と似ています（写真1）。

記され、「ひろいかけ」である3つの猿尾があることと各猿尾の寸法が記述されています。この「ひろいかけ（拾掛）」とは石積みを意味するようです。木曽川の事例ですが石積みの猿尾堤が各務原市前渡西町に現存しています。小揚舟場は小さな荷物を揚げる場所という意味で、棧橋のようなものが3つ連続して表現され、道で接続されています。なお現在の鵜飼観覧船乗り場は堤を乗り場の回りにめぐらしており、絵図に描かれた中河原湊の姿と似ています（写真1）。



■写真1 鵜飼観覧船乗り場

3 渡し場と長良湊

中河原湊の右隣には道（高富街道）が川に向かって延び、「渡し舟場」と注記されています。川の北岸にも家並みの間を川から北に向かう高富街道が描かれ「長良渡し

4 家並みと長良川役所

南岸・中河原湊の左隣に高富街道に沿って板葺・葦葺の家並みが描かれ「中川原」と注記されています。今の川原町はこのあたりです。北岸でも高富街道沿いと川岸護岸表現の上部に葦葺屋根の家並みが描かれています。

中河原湊や家並みから少し離れて「御役所」と注記された大きな板葺の建物が描かれています。これは尾張藩が設けた長良川役所で、川を通る筏や荷舟から運上金を徴収していました（写真2）。役所に隣接して役所付問屋があり運上金徴収の実際の業務を担当するとともに、小揚人・筏乗手を統率して舟・筏の支配にあたっていました。小揚人は岐阜町への物資陸揚げと運送の独占権を認められた者のこ



■写真2 長良川役所跡

5 年代と目的

とで、筏乗手は上流から流されてくる筏を組み直し下流の桑名・名古屋方面へ送る者のことです。

これまで右上の注記中に「元禄十一年（1698）」と書かれていることから、絵図はこの年に作られたと考えられてきましたが、記載内容は絵図と関係が無いようです。したがって1698年作図説は再検討の必要があります。なお中河原湊の形状が詳しく描写されていることや猿尾の寸法を具体的に記述していることに注目すると、絵図は猿尾修理を主とした中河原湊改修のために作成されたのかもしれない。

* 次回は2026年10月号です。お楽しみに